まえがき

本書は，2022 ～ 2023 年度にアジア経済研究所で実施した共同研究会「南部アフリカにおける国境を越える人びとの社会的保護」の最終成果である。サハラ以南アフリカで最も多くの移民を受け入れている南アフリカ，そして同国に多くの移民労働者を送り出してきた近隣のモザンビークとマラウイという 3 カ国の事例をもとに，移民の社会的保護にかかわる制度，実態，課題について論じている。日本語では馴染みが薄い社会的保護（social protection）という言葉は極めて包括的な概念で，社会保障や社会福祉のみならず，雇用，ヘルスケア，教育，住宅，貧困削減のための政策や制度を含んでいる。さらに移民研究の文脈では，移民自身が社会的保護を実現するために行使するさまざまな戦略，そして移民が利用可能な公式・非公式の資源も重要な研究対象であり，本書でも制度と実践の両方を取り上げている。

私自身が「移民の社会的保護」という研究主題に興味をもったきっかけは，2014 年 10 月に南アフリカのジョハネスバーグ市で開催された国際会議に参加したことだった。ザンビアに事務所をおく「南部アフリカ社会的保護専門家ネットワーク（Southern Africa Social Protection Experts Network: SASPEN）」という非営利団体が移民とその家族の社会的保護をテーマに国際会議を開催していて，南部アフリカ諸国の社会保障にかかわる省庁，国際機関，研究者，市民社会組織の代表が登壇した。同会議では国際的・地域的な枠組みや社会保障の権利のポータビリティの事例などが報告された。私は当時，非正規移民の研究を開始したところだったが，非正規移民を対象とする社会的保護の制度について議論することは難しいように思われた。そのときに感じたのは，近隣諸国から南アフリカの鉱山へ協定を通じて送り出された移民労働者の社会的保護の制度をまず調べるべきであるということだった。

この問題意識をもとに，以前から南アフリカの社会保障制度について研究を行っていた同僚の牧野久美子さん，そしてモザンビークの鉱山労働者について研究してきた網中昭世さんをお誘いし，本研究会が実現した。2021 年度はコロナ禍に伴う海外への渡航制限があったため，所内で準備研究会「南部アフリカにおける国際移動と社会的保護」を組織し，月に 2 回のペースで半年ほど関連文献を輪読する勉強会を続けた。また，アルゼンチンにおける女性移民労働

者の社会保障について研究を進められていた宇佐見耕一さん（同志社大学教授）を講師にお迎えし，ラテンアメリカにおける移民と社会保障の制度についてご報告いただいた。アフリカとの相違点や共通点に関する有意義な意見交換を行うこともでき，忙しいなか興味深いご報告を準備してくださった宇佐見さんに改めて感謝申し上げる。2022 年度には渡航制限が解除され，マラウイ，モザンビーク，南アフリカで現地調査を実施することができた。現地調査でお世話になった方々については各章で言及されているのでここでは繰り返さないが，とくに第 4 章と第 5 章は，現地でインタビュー調査ができなければ書き上げられなかっただろうと思うと，コロナ禍がとりあえずは収束して，以前のような調査研究活動が可能となったことに改めて感謝せずにはいられない。

本書は，南アフリカ，モザンビーク，マラウイという南部アフリカにおける移民の移動先国（受け入れ国）と出身国（送り出し国）の社会的保護の制度と実態について論じたものである。だが，国境を越えた人の移動はもちろん南部アフリカ地域に限られたものではないし，移民の社会的保護や社会的権利をどう実現するかという課題は，日本を含めて，多くの移民受け入れ国が直面しているものである。本書は，オンラインで無料公開され，誰でもダウンロードが可能な電子書籍／ eBook として出版されることから，南部アフリカという地域に対して強い興味をもつわけではない方々にも，ぜひ気軽にダウンロードいただき，一読いただければ幸いである。また，有料ではあるものの，アマゾン，楽天ブックス，三省堂書店オンデマンドでプリント・オン・デマンド（POD）として注文し，冊子体を入手することも可能であるので，ご関心のある方にはぜひそちらもおすすめしたい。

アジア経済研究所の共同研究会の最終成果の多くは，匿名の 2 名の査読者による審査を経て，修正を施した上で，出版が可能となるという手続きを経ている。本研究会の成果に対しても，査読者の方々から数多くの建設的なコメントをいただいた。この場を借りてお礼申し上げる。また，研究会の実施過程では，岸真由美さんをはじめとする研究推進部研究推進課の方々から事務的な手続き面で多くのサポートを得た。本書の編集・出版過程を導いてくださったのは，学術情報センター成果出版課の池上健慈さんである。研究会の立ち上げから成果出版に至るまでの過程にかかわってくださったすべての方々に深く感謝申し上げる。

2024 年 8 月　編者